

2020年の総合文化研修Ⅰの取り組み ～松江の地域と祭り～

The Approach for 2020's Arts and Sciences Research Trip I

～Matsue's Communities and Festivals～

Dustin Kidd **山根繁樹** **小倉佳代子**
(総合文化学科) (総合文化学科) (総合文化学科非常勤)

キーワード：新型コロナウイルス、松江市、祭り、研修

1. はじめに

総合文化学科の学びの中で大きな柱になっているのは、総合文化研修Ⅰである。新カリキュラムになってから3年目を迎えたこの研修は、新型コロナウイルスの影響で、大きく変えなければならなくなった。1年目、2年目は、大田市大森町で2泊3日の泊まり込み研修だった。事前に大森町について調べ、疑問から問いへ、問いから仮説へ、そしてその仮説を検証するために、大森町で聞き取り調査を行ってきた。しかし、新型コロナウイルス対策として、長い時間のバス移動を伴う研修や宿泊を伴う研修は実施しないこととなり、急遽実施場所や方法を変更することになった。この報告書では、コロナ禍の中の総合文化研修Ⅰの実施の詳細や学生の研修活動を紹介する。

2. 実施内容の変更経緯

1)実施場所

まず、総合文化研修Ⅰ・研修計画Ⅰは総合文化学科のカリキュラムにおいて、大事な科目であるため、完全に中止にはできなかった。内容変更をすることにはなったといっても、授業担当者の筆者3名はどのように変更すればよいか、頭を悩ませていた。

2020年4月に入って、授業開始が少し遅れることになり、内容を考える時間ができた。2020年3月27日に、天神祭で神輿活動を行っている松江天神神輿連がFacebookページに

7月24日・25日に夏祭（天神さんの夏祭り・遷宮記念に江戸宮を蔵から出します。）なのですが、コロナ蔓延防止のため、連合神輿渡御と子どもみこしパレードを取りやめ、規模を縮小したお祭りとすることにしました。神輿を担ぐという行動がリスクが高いと判断したためです。神輿の担ぎ人募集も行いません。（以下略）¹⁾

と発表した。また、同じ時期に鑿行列が中止になるという噂もあった。(実際に6月の下旬に正式に中止が発表された。²⁾) 祭りの中止や規模縮小の影響で、地元の学生も、松江市外や島根県外の学生も、本来なら参加できるはずの祭りに参加できない。新型コロナウイルスの影響で開催がないからこそ、その地域に出向いて、地域の人たちに聞き取り調査をするという、ある意味ピンチをチャンスに変える機会ではないかとキッドが考えた。その考えに基づき、研修の内容を松江の祭りや地域というテーマにしたかどうかと提案した。

しかし、38人の1年生が履修登録していた。密を避けることも優先的に考えなければいけない。班分けを考えると9班を作って、4~5人のメンバーで行動するのが理想だと考えた。ただ、天神祭は天神町の商店街が中心となっている一つの地域であり、38人全員をそこに行かせるわけにはいかない。また、鑿行列はたくさんの地域が参加するが、すべての班が鑿行列を取り上げるのは難しい。あともう一つの祭りを選んで、天神①、鑿行列④、もう一つの祭り④とするのがよりよい分け方と考えた。そこで、新型コロナウイルスの影響ではないが、10年に1度しか開催しないホーランエンヤが2019年に開催され、2029年まで開催はない。ホーランエンヤも取り上げたら、学生にいい機会だと考えて、三つ目の祭りに選んだ。

祭りが決まったので、次はどの地域を取り上げるか、考える必要があった。地域に出向いて聞き取り調査をするとなると、なるべくまとまった地域であるとよい。ホーランエンヤの場合は、参加する6つの地域(松江城山稲荷神社、馬潟、矢田、大井、福富、大海崎、そして東出雲町にある阿太加夜神社)はすべて取り上げるべきだと考えられた。位置関係を参考にして、城山稲荷神社を単独地域とし、阿太加夜神社・馬潟、矢田・福富、大井・大海崎と四つの班が担当できるように地域を分けた。

鑿行列に関しては、たくさんの地域の中から、教員がつながりを持っている地域がいいと考えた。そうであれば、学生が行き詰ったときに助けることもできる。その理由から、北殿町・南殿町(キッドが笛の応援で参加したことある地域)、北堀・内中原(山根の知人が参加している)をまず選んだ。その後、松江市内の地域の関係を学ぶきっかけを作るため、橋南地区と鑿友会も取り上げた。キッドには橋南地区の鑿行列に関わっている知人がおり、その方をおして、松江市の「橋北・橋南」について学べると考えた。そして、キッドの友人がおり、どこの地域にも属さない鑿友会は、昔から参加している地区に比べて、後から出来上がったグループであり、地域と祭りを考えるチャンスになると考えたため、調査対象に選んだ。

2) 授業開始時期

授業の開始時期について、実際の研修は夏休みに行うので、総合文化研修計

画 I の 8 回の授業はいつ開始するべきかという問題もあった。なるべく夏休みに近い方がいいのと、できる限り対面形式で行いたいという思いもあった。なぜなら、新しい挑戦ということもあり、教員側の準備も必要で、やろうとしている内容が少し難しく、対面でないとうまくいかないのでは、と心配したからである。そこで初回のみは遠隔で行い、その後は対面で行うことにした。

3)班分けの留意点

1 年生にとって、総合文化研修は初めての対面授業になる可能性が高く、そもそもオリエンテーションでしか顔を合わせていないはずであった。44 人中 38 人が履修しているので、学生同士が新しい仲間になる大事な機会である。そこで、上記の通り 9 班に分けることにしたが、同じ高校の学生が同じ班に入らないように分けた。さらに、松江の地域と祭りということで、どの班にも松江出身、もしくは松江に近いところの出身者がいるように分けた。少しでも松江のことを知っている学生がいると学生も安心するだろうと考えたのである。

3. 研修実施の日程と内容

1)総合文化研修計画 I

総合文化研修計画 I は 8 回の授業で、研修計画と研修で大学の基本の学びを経験することが狙いである。ある事柄に疑問を抱いて、その疑問から問いへ、問いから仮説へ、そしてその仮説を検証する、という基本的な流れをある程度経験して、理解したら、すべての学びに役立つ。

研修計画の初回の授業は 6 月 9 日に行った。初回だけが遠隔形式だった。初回は全体のオリエンテーションと実施内容を説明した後、学生をそれぞれの班に分けて、上記の研修場所をそれぞれ決定した。そのあと、Team 内の 9 チャンネルで班ごとに分かれて、自己紹介と話し合いを行った。特に、班が調べる祭りについての知識を共有し、どのように調べていくかの話題が多かった。2 回目の授業は対面授業が許可されたから、図書館に行って資料探しなどの調べ学習を行った。3 回目はそれまでに分かったこと、そしてそこから生まれた疑問や問いについて発表を課した。それに対して教員がコメントした。最後にその日の内容をまとめたレポートも課した。4 回目の前に教員がレポートに対して、またコメントした。そして残りの時間と 5 回目の授業では、学生が調べ直して、発表準備を進めた。教員は主に学生の個別対応をした。6 回目では、各班が 2 回目の発表を行った。2 回目は問いから考えた仮説も発表に含めた。それに対して、また教員がコメントをして、最後に 2 回目のレポートを課した。発表の内容に、検証のための実施計画をできる範囲で加えることとした。7 回目の授業は夏休みに入る前で、実施計画を発表した後に、教員がその後の予定を伝えた。詳しくは次の 3 の 2) で述べる。そして、最終回は 9 月 29 日に

研修結果の発表を行い、最後の報告書を10月中旬に提出させ、研修が終わった。

2) 総合文化研修 I

検証のための研修実施は、それぞれの班が単独に行動をしたため各班の動きは小倉が表にまとめた(表1)。

表1 総合文化研修 I 取材先一覧

| 班 | 担当 | 日時 | 取材先 | 取材方法 |
|----|-----------|----------------|--|------|
| 1班 | 橋南地区 | 8/24(月) 10:00~ | どう保存会 会長 長崎敏明様 | 直接 |
| 2班 | 阿太加夜神社・馬潟 | 9/1(火) | <馬潟地区>馬潟地区の方々(氏名不明) | 直接 |
| 3班 | 繋友会 | 7/30(金) | 上代綾様 | 直接 |
| | | 8/12(水) | 市役所の方 | 直接 |
| 4班 | 北堀・内中原 | 8/12(水) | <松江市観光協会>松江祭繋行列保存会 小林 孝志様 | 直接 |
| | | 9/4(金) | <北堀町>北堀町三区繋宮保存会会長 石原 幸雄様、 同理事 林 文章様 | 直接 |
| | | 9/5(土) | <内中原町>内中原繋保存会理事 岡 俊一様 | 直接 |
| 5班 | 城山稲荷神社 | 8/12(水) | ホーランエンヤ伝承館 新庄様 | 直接 |
| | | 9/17(木) | <北堀町>北堀講中 石原様、林様 | 直接 |
| 6班 | 矢田・福富 | 8/12(水) | <松江市役所>観光振興部 観光文化課 目次 誠様、 同 山内 巧様 | 直接 |
| | | 8/18(火) | <福富地区>福富ホーランエンヤ保存会 福富地区総代長 稲場久和様 | 電話取材 |
| | | 8/26(水) | <矢田地区>伝承ホーランエンヤ矢田保存会 矢田地区 総代長 松浦哲次様 | 直接 |
| 7班 | 南・北殿町 | 8/12(水) | <松江市観光協会>繋行列保存会 小林様 | 直接 |
| | | 9/14(月) | <北殿町>荻野様 | 直接 |
| | | 9/24(木) | <南殿町>大久保様 | 直接 |
| 8班 | 大井・大海崎 | 8/12(水) | ホーランエンヤ伝承館 | 直接 |
| | | 9/19(土) 13:00~ | <大井町>野津照雄様 | 直接 |
| | | 9/20(日) 13:00~ | <大海崎>古藤弘巳様 | 直接 |
| 9班 | 天神祭 | 7/25(土) | 天神神輿連 宮頭 寺津様 | 直接 |
| | | 9/17(木) | 今岡ガクブチ店 | 直接 |

天神祭は夏休みに入る前に終わってしまうため、9班は少し早めに一部の研修を実施した。7月25日の午後、松江天神神輿連の寺津様が対応してくださいました。9班の学生に山根とキッドが同行した。

8月12日は多くの班が繋行列とホーランエンヤにかかわっていたため、教員側が連絡して、お話をいただけるようお願いした。各班で代表者を決め、現地集合ができない学生については、教員が公用車で市役所とホーランエンヤ伝承館に連れて行った。市役所からホーランエンヤ伝承館へ行く前に、松江市観光協会の方がホーランエンヤの5大地それぞれの総代長の連絡先を教えてください、学生の研修を支援してくださいました。また、繋友会の上代様に関して、キッドが連絡を取り合っ、学生と会える日程の調整を行った。

それ以外の研修実施は表 1 の通り、班ごとで行動した。ほとんどの班は直接お話を伺えたが、第 6 班の福富地区の場合は、総代長の稲葉様に連絡した際、新型コロナウイルスの拡大防止への配慮として、電話対応のみとなった。教員側では、その都度カメラと IC レコーダーの貸し出しはできたものの、上記以外の研修実施には同行できなかった。

4. 学生による調査報告の例

1) ホーランエンヤ 矢田地区・福富地区

ホーランエンヤについて調査した班のうち、矢田地区・福富地区を担当した 4 名（第 6 班）は、それぞれの地区について調べ、現地調査において松浦哲次氏（矢田地区総代長）、稲葉久和氏（福富地区総代長）にお話をうかがった。そのなかで、次のような疑問についての調査報告を行っている。

・矢田地区は平成 21 年のホーランエンヤから町外から参加した方がおられたが、どのようにして町外から募集するのか。

（仮説）まず町内で募集して、足りない部分を他地区の知り合いの方を通じて集めるのではないか。

（結果）松浦さんによると、「初めから地区外の参加を求めたわけではない。昔のように全員が参加するという半強制的な時代から、多様化する個々の考え方を尊重するという時代に環境が変化し、参加されない方もいるという状況の中で、その足りないところを他地区にお願いする」と回答いただいた。過去には公募制で募集しようとしていたこともあったが、船神事は危険を伴うため、「やりたい」という気持ちだけでは事故やけががあった時に責任が取れない。そのため慎重に人を選んでいるそうだ。地区外からの受け入れに対し地域の方々は戸惑いを感じておられたり、逆に地区外から参加される方で気を使っておられたりする方もいたそうだ。しかし、地元住民と地区外の参加者との交流イベントや練習を通して団結することができたという。深刻な人口減少問題を抱える矢田地区の今後の取り組みに関しては、「次回のホーランエンヤまでの間にできるだけ市民の方にホーランエンヤを様々な形で紹介し、地区外からの拡大と伝承につなげていきたい」という。女性の参加について意見を伺ったところ、「昨年もそのような話はあったが、他地区から来てもらう場合でも女性の参加は避けようということになった。200 年続く歴史の中で女性の参加は例がないため、まだ判断できない」と回答をいただいた。

自分たちで立てた「問い」に対する「仮説」は、自分たちで想定可能な範囲に収まっていた。それに対し「調査結果」は、想定を超え、町内の方・町外の方ともに戸惑いや葛藤を抱えていることが明らかにされている。現地で聞いた

想定を超えた実情が、地域社会で伝統を支えることの困難さを、学生にも実感させているといえよう。

2) 鑿行列 北堀町・内中原町

鑿行列について調査した班のうち、北堀町・内中原町を担当した 5 名（第 4 班）は、調査を終えるにあたり、自分たちの「疑問点以外で理解が深まった点」として、次のように述べている。

研修の中で一番理解が深まった点は、祭りとしての鑿行列だけでなく、地域としての鑿行列についての考えを教えていただいたのだが、お話を聞くと、北堀町、内中原町ともに鑿行列が地域のコミュニティづくりに大いに貢献していることがわかった。例えば、県外や市外から引っ越してこられた方ですぐに町内会に入り、町内の人々と交流する機会を得ることは難しいことである。しかし、鑿行列への参加を皮切りに、地域の人々と交流し、町内会に入る機会を簡単に得ることができる。このように、意外なところでも鑿行列という行事が地域社会において重要な役割を担っていることがわかった。

鑿行列という、自分たちに馴染みのない祭りについて調べ、「問い」を立てていく作業は、単純に「新しいこと」に対する興味だったはずである。だが実際に地域で活動しておられる方々に直接お話をうかがうことで、「コミュニティづくり」という自分たちにも関わる問題との繋がりを発見することができている。関わりのない祭りについて知ることが、自分たちのありようを振り返るきっかけにもなっているのである。

3) 天神祭

天神祭について調査した 4 名（第 9 班）は、天神町にある今岡ガクブチ店の方にお話しをうかがった。そのなかで、次のような疑問についての調査報告を行っている。

・ 神輿を担ぐ人の年齢層・どこの地区の人が多いのか？

（仮説）担ぐ人は天神町に住んでいる方なら子供からお年寄りの方までいそう。また天神町の方だけでなく、近くの幼稚園・小学校で参加しているのではないか。

（結果）年齢層としては小学生から 20 代・30 代が中心で、年配の方でも部分ごとに担ぐのを手伝い、出雲や雲南、米子からも参加される方がいることが分かった。また、過去には 70 歳の女性の方も参加されたことがある。また、小学生が参加しているのではないかという仮説を立てていたが、実際に町内から参加している“町会チーム”と町外から“児童クラブチーム”、“大庭小学校 5 年生チーム”などのようにこども御輿に参加されていることも分かった。

このことから、疑問点以外で理解が深まった点として次のように述べている。御輿担ぎに参加することは家族以外の自分と違う年齢層の人と関わることができる一つのきっかけになると思っていたがそれだけでなく、教育の一つとして今まで自分の知らなかった社会のルールを学ぶことができ、幅広い年齢層の人と交流することで結束力が生まれるのが良いと思った。みこしの制作に費用は町内でお金を集めていて、地域一体となって天神祭は成り立っているのだと思いました。また実際に話を聞いてみて、自分が子供の頃に子供神輿を担いでいたので、大人になって自分の子供神輿に参加させてあげる人もいると知り、継承して行ってほしいという思いも聞くことができたので良かった。

この結果から、学生が「祭り」が社会の中の大事な役割を担っていることに気づいたことが分かる。それは様々な人たちとの交流の場だけでなく、社会の一員としての決まりを学べる場でもある、ということである。さらに地域と祭りの密接な関係に気がつき、切り離すことができない、切り離されたら終わってしまう、ということも少しでも理解したといえる。

4)ホーランエンヤ 城山稲荷神社

ホーランエンヤについて調査した班のうち、城山稲荷神社を担当した4名(第5班)は、神社を支援する人たちに着目した。その調査結果について、次のように述べている。

城山稲荷神社の氏子の範囲についても伺った。城山稲荷神社は松江城の敷地内にあるため、氏子の範囲が不明であった。城の周辺に住む人々が氏子であると予想していたが、城山稲荷神社には「氏子」は存在しないことがわかった。氏子ではなく「講中」と呼ばれる、城山稲荷神社のファンクラブのような人達が存在しており、彼らがほかの神社という氏子の役割を果たしている。ホーランエンヤでは、この講中の方たちが城山稲荷神社から船までご神体を運ぶ神事を担当している。

城山稲荷神社はホーランエンヤの「ご神体の移動」という神事に深く関わっている。城山稲荷神社に関わる人、特に講中の方々はこの神事にとっても重きを置いており、誇りを持っていることが分かった。また、この調査の後、個人的に城山稲荷神社の講中に所属する方に話を聞く機会をいただいたが、城山稲荷神社の講中は年配の方が多く、若い人はいないとのことだった。所属はせずともこういった人々の存在や神事における重要性を私たちのような若い世代が知り、継承していくことが重要だと強く感じた。ホーランエンヤのきらびやかな船上でのパフォーマンスだけでなく、本来の目的であるご神体の移動の神事について意識すると、また違った目線で楽しむことができるのではないだろうか。(中略) 仕事

の分担を決める際、皆自分がしたい担当が誰かと被ってしまうので揉め
てしまうという話を聞いた。本意でない担当になってしまった場合あま
りやる気になってくれないなど、歴史ある文化を継承していくことは素
晴らしいことであるとともに、大変なことでもあるのだと痛感した。

まず、ここで学生が神社に対する「常識 (=思い込み)」が覆されたのが面
白い展開である。また、氏子なら神社の近辺に住んでいる人は基本的近くにな
るが、講中は自ら申し込まないといけないので、何となくなれるものではない。
それが講中の継承の大切さと難しさを物語っている。また、直接かかわってい
る人たちに話をうかがえたことで、普段見えない「裏側」の事情にも気づき、
一般的に知られない大変さも見えたことがとてもよかった。

5. 教員の感想

総合文化研修計画 I を始めるにあたって心配だったのは、学生同士の関係づ
くりである。この授業が初めての対面という状態で、6月スタートにもかかわ
らず教室がわからない学生もいた。まずは小グループでの活動を、Teams 上
の班別チャンネル内で行った。ここでのやりとりは、今振り返ればたどたどしく
もあるが、学生たちは「ともに学ぶ仲間」と出会った喜びを感じていたよう
に思われる。そういう意味では、学生同士が出会ってしまえばさえすれば良かつ
たのだともいえる。一方、授業の中身について、当初、学生にとって「祭り」
といった伝統行事について調べることは、「新しい知識」を得ることと感じら
れていたのではないか。それは、たとえばホーランエンヤの船の飾り付けの由
来といった、ネット上に「答え」を見つければ解決してしまうような「問い」
が多く立てられていた点にみてとれた。だが、実際の研修の醍醐味は、当事者
として関わる人たちに直接話を聞けるところにある。このことを何とか理解し
てほしいと思っていたが、「計画」の段階ではなかなかうまくいかなかった。

総合文化研修 I の段階となり、各班がそれぞれの活動に入っていった。学生
に対して注意を促したのは、インタビューにおいて自分たちの想定していなかつ
た話を拾いあげる姿勢を持つことである。「計画」の段階で立てた「問い」
や「仮説」を逸脱していても、そこで語られている話に別の「問い」やそれへ
の「答え」が現れていることはあり得る。聞き逃さない姿勢を保つための秘訣
は、「おもしろがること」だと伝えた。学生たちの報告書には、「おもしろがっ
た」姿がうかがわれる。当事者として関わる人たちの話を聞くことは、単なる
「知識」を得ることではなく、そこにいる「人」に、その人の「ありよう」に
触れることである。そして、触れることは同時に触れられることでもあり、当
然の帰結として、自分を振り返ることとなる。実際の「研修」において学生の
多くは、自分とは異なる「人」の「ありよう」に気づき、自分を振り返る機会

を得たようだ。その異なりへの気づきが、次の興味、次の問題意識を育んでくれることを期待している。(山根繁樹)

夏休み中のフィールドワークがメインとなるこの授業は、コロナ禍のため今年には大幅な内容の変更を余儀なくされた。総合文化研修計画 I では内容のみならず、授業の方法にも大幅な変更があった。密になりがちな対面授業や、大人数での移動に制限があったため、最初は各自での調査、その後 4~5 人の班での作業がメインとなった。ある程度、対面授業が可能になってからは、インターネットを利用した資料や図書資料の検索方法の学習や、理解した内容の班内での共有、調べた事柄から疑問を出すこと、それを調査するためにはどのような問いが必要か考え、それらをまとめ班ごとに発表した。

調査や結果の共有やまとめる作業は、オンラインでの作業が多くなった。各自の行った作業や調査を Teams 上で書き込み、レポートも Teams で共有できたが、さらに内容をまとめたり発展させたりするのはやはり対面しながらのほうがやりやすく感じた。対面だと、雑談も含めたお互いの話の中でふとした気づきがあったり、疑問がわきあがったりしやすいように思う。

Teams を利用して良かった点は、発表や発言の記録が残るので振り返りやすいことだった。Teams 内の班ごとのグループで、もう少し積極的に現状を書き込んでもらっていたら、活動の軌跡がよりわかりやすくなっていたかもしれないと思う。各自の調査や繰り返し行なう班ごとの発表、さらにそれをレポートにまとめる作業の数をこなすことで、この授業ではフィールドワークに必要なことを学んでもらえたのではないかと思う。

総合文化研修 I ではコロナ禍の中ではあったが、少し状況が良くなっていた時期にインタビューを行うことができ、学生もフィールドワークの醍醐味を少しは味わうことができたのではないだろうか。私は残念ながら個々のインタビューに同行することができなかったが、松江市役所やホーランエンヤ館での取材やインタビューでは積極的に質問をしたりメモを取りながら聞いたりすることができる学生も多かったように思う。実際のインタビューではなかなか想定した通りの質疑応答にはならなかったと思うが、学生は「わからないこと」があるということがわかったり、「まだまだ知らないことがたくさんある」ということや、「はっきりと目には見えないけれど、脈々と伝えられてきている文化」があるということを経験したりしてくれたのではないかと思う。

この授業を通して、記録や資料を見るだけではわからない「文化」について、理解や愛着を深めるための第一歩を踏み出してもらえれば、と思う。(小倉佳代子)

学生も教員もなかなか思うようにできない中、とても貴重な体験をたくさんできた。学期の開始当初、焦りを感じることも多く、正直どうしたらよいか分

からず前に進める道が見えなかった。慣れないことだらけで、その中で総合文化研修Ⅰ・研修計画Ⅰをどのように扱えばよいかも分からなかった。しかし、山根先生と小倉先生との相談を重ね、徐々に光が見えてきた。この大変な時期を「ピンチ」と捉えず、「チャンス」として考えるようにすると、次から次へとアイデアが生まれてきて、とても面白い授業計画を一緒に作り上げられた。

1年生は大学の学びに慣れるうえ、遠隔授業にも慣れることを強いられ、とても大変だったと思う。この授業では、学生が試行錯誤をしながらも、一所懸命に自分たちの疑問、問い、仮説を考え、研修計画を練り上げた。疑問の段階から意外なところに注目した学生もいて、教員側でも新たな気づきがあった。ともに学んでいける研修になり、理想的な学びとなったと思う。また、この研修で得た知識から更に興味を持ち、キラキラドリームプロジェクトに活動をつなげた学生もおり、この研修から生まれた喜ばしい成果である。(Dustin Kidd)

6. おわりに

今年度の総合文化研修Ⅰは教員学生ともに、新たな困難を乗り越えなければいけない研修となった。しかし、様々な制限の中で、多くの発見もあって、今後の研修Ⅰに活かすこともできる。新型コロナウイルスの猛威が収まった後、大森町との関係を大事にしつつ、総合文化学科の学生に大学の学びを体験できる機会をたくさん提供していきたいと考えている。最後に、この度の研修にご協力をしてくださった皆様にお礼を申し上げます。お陰様でとても有意義な研修になりました。

【注】

- 1) <https://www.facebook.com/SongJiangTianShenShenYuLian/posts/3292394320775208> (最終閲覧日 2021年3月8日)
- 2) 奥平真也「「松江祭鬨行列」、感染防止で中止 / 島根県」『朝日新聞』2020年6月20日朝刊。



(左) 白潟天満宮での取材



(右) ホーランエンヤ伝承館での取材